

## J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注

——マルクスの最初の経済学研究より——

### 細見英

#### 解 説

ここに訳出するのは、マルクスの最初の経済学研究のうち、ジェイムズ・ミルの『政治経済学綱要』（James Mill, Elements of Political Economy, 1st edition, 1821.）からの抜萃にマルクスが付した批判的評注である。

#### 1

マルクスは、『ヘーゲル国法論批判』（一八四三年春—夏）および『ヘーゲル法哲学批判、序説』（一八四三年末—四四年初め）を執筆したのち、ヘーゲル法哲学にたいする体系的・徹底的な批判を意図して、いわゆる「近代の国民経済学」の批判的研究に着手した。この、マルクスの最初の経済学研究

の成果は、『経済学・哲学手稿』（一八四四年四月—八月頃執筆）として残されているのであるが、この草稿のほかは、主として経済学関係の諸文献からの抜萃を主要内容とする九冊のノートが保存されている。一九三二年、アドラツキイによって刊行された Marx/Engels, Gesamtausgabe (MEGA), Erste Abteilung, Band 3. は、これらのノートが一八四四年初めから四五年初めにかけて作成されたものと推定し、「外見のおよび内容的な証拠をすべて顧慮したうえで、可能なかぎり年代順に」配列して、ノートの内容目録を収録している。<sup>(2)</sup> それによれば、これらのノートはつぎの諸文献の研究を含んでいる。(一)内は、その文献にあてられているノートのページ数。

ノート I

- Say, Traité d'économie politique. 3<sup>e</sup> édition, 1817. (21)
- Skarbeck, Théories des richesses sociales. 1829. (24)
- Say, Cours complet d'économie politique pratique. 3<sup>e</sup> édition, 1836. (4)
- ノールム
- Adam Smith, Richesse des Nations. Trad. p. G. Garnier. 1802. (24)
- ノールム
- Levasscur, Mémoires. T. I. 1829. (5)
- Smith, Richesse des Nations. (11)
- ノールム
- Xenophon Xenophon (1½)
- Ricardo, Des principes de l'économie politique et de l'impôt. Trad. p. F.-S. Constancio. 2<sup>e</sup> édition, 1835. (17)
- James Mill, Éléments d'économie politique. Trad. p. J. T. Parisot. 1823. (17)
- ノールム
- Mac Culloch, Discours sur...l'économie politique. Trad. p. G. Prevost. 1825. (9)
- Destutt de Tracy, Éléments d'idéologie. 1826. (3)
- James Mill, Éléments. (6)
- ヘンゲルスの『国民経済学批判大綱』からの抜萃が、紙片と書つてなつてゐる。
- ノールム
- Lauderdale, Recherches sur la nature et l'origine de la richesse publique. Trad. p. E. Lagentie de Lavaisse. 1808. (16)
- ノールム
- Schulz, Grundsätze der National-Ökonomie. 1843. (1)
- Friedrich List, Das nationale System der politischen Ökonomie. Bd. 1. 1841. (17)
- Oslander, Enttäuschung des Publikums über die Interessen des Handels, usw. 1842. (ca. 3)
- Oslander, Über den Handelsverkehr der Völker. 1840. (1)
- Ricardo, Principes. (1)
- ノールム
- Mac Culloch, Discours sur...l'économie politique. Trad.

„Economistes financiers du XVIII<sup>e</sup> siècle“, hg. v. Eugene Daire, 1843. からの抜萃<sup>6</sup>

- (1) Boisguillebert, Le détail de la France, etc. (4½)
- (2) Boisguillebert, Dissertation sur la nature des richesses, etc. (10%)
- (3) Boisguillebert, Traité de la nature...des grains. (4)
- (4) Jean Law, Considération sur le numéraire et le commerce. (1)

紀元前七五二年から三五〇年ごろまでのローマ史年表。(6)

ノートⅡ

Eugène Buret, De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France. 1840. (24)

右のうち、すくなくとも最初の五冊は、『経哲手稿』執筆以前に作成されたものようである。<sup>(3)</sup> MEGAの編集者はこれらを、『経哲手稿』に「直接関連して興味深く、その直前の段階のものとして、マルクスの仕事ぶりを特徴づける実例を提供するもの」と評価して、<sup>(4)</sup> のちのポアギュームールからの抜萃とともに、その内容全体をMEGAの前掲の巻に収録している。

MEGA におちめられているマルクスのノートをみれば、その大半は諸文献からの抜萃でうすめられているが、部分的にマルクス自身のことばで批判的評注がくわえられている。

これらの評注は、経済学批判の文字どおりの出発点におけるマルクスの問題意識と批判の構えを探るうえできわめて興味深いものであるが、とりわけ量的に多く、しかも注目すべき内容を含んでいるのが、シェイムス・ミルの『政治経済学綱要』からの抜萃に付されている批判的評注である。<sup>(5)</sup>

(1) この点については、わたしの論稿「疎外された労働」の概念」(二)の第一節(一)『法哲学』批判の一環としての『経済学・哲学手稿』(立命館経済学、第九卷第二号)を参照されたい。

(2) MEGA, Erste Abt., Bd. 3, S. 410ff.

(3) ただし、ノートⅣの Xenophon からの抜萃だけは別。これは一八四五年、ブリュッセルで書かれたものらしい。

(4) M. A. O., S. XIII.

(5) M. A. O., S. 520-550.

右にあげたノート目録にみられるようにマルクスは、スミ

ス、リカードウの主著を読みおえたのち、ミルの『政治経済学綱要』の研究を、仏訳本を使ってノートIVとVでおこなっている。

周知のようにミルの『綱要』は、第一章「生産」、第二章「分配」、第三章「交換」、第四章「消費」の四章よりなる。マルクスはこれら各章各節の大部分にわたって、主としてドイツ語で抜き書きをおこなっているのであるが、とりわけ長い抜萃をおこなっているのは、第二章（「地代」「賃金」「利潤」の三節よりなる）全体、第三章の第三節「賃金および利潤における変動の交換価値に及ぼす影響」、および、第三章の第六節「交換業務にとって便利な、媒介者としての特殊の一貨物」に始まり第七節「貨幣の価値を規制するもの」、第八節「貨幣の量を規制するもの」にいたる貨幣論の基本部分、ならびに第四章第三節「消費は生産と同範囲であること」である。

このうち、第三章第八節からの抜萃の半ばと、第四章第三節のはじめの部分の抜萃のあとに、マルクスは比較的ながい批判的評注を挿入している（以下、前者を第一評注、後者を第二評注とよび、あわせて「ミル評注」と略称する<sup>1)</sup>）。

これらの評注におけるマルクスの論述は、『綱要』の当該

箇所におけるミルの所論の批判にとどまっているものではない。ここでのマルクスの主要関心は、国民経済学の基本的諸範疇の批判的検討にある。すなわち第一評注ではマルクスは、ミルによる貨幣規定——「交換の媒介者」という規定——を評価しつつ、貨幣のゲネシス（私的所有——（交換）——↓価値——↓貨幣）を論理的に解明することによってその本質（人間の相互媒介活動の物的疎外態であること）を明らかにし、この見地から貨幣形態の必然的發展としての信用および銀行制度に論及するとともに、交換を媒介とする私的所有の価値への転化に対応するところの分業の発生、労働の営業労働 *Ewerbsarbeit* への転化を説いている。そして第二評注では、私的所有ならびに労働の形態転化の契機をなす交換——「私的所有に基礎をおく交換」の特質を、ミルの叙述から学びつつ展開している。

右のように第一評注では貨幣に、第二評注では交換に焦点をあわせて、国民経済学の基本的諸範疇の検討がおこなわれているのであるが、とりわけ第一評注を読むとき明らかに推定しうることは、これらの評注においてマルクスが、貨幣本質の概念的把握を通じてさらに資本・労働・土地所有関係の

論理的演繹をおこなうことを意図していることである。いいかえればマルクスは、資本・労働・土地所有関係⇨近代市民社会の基底的諸関係の概念的把握を目標としつつ、さしあたりここでは貨幣本質の概念的把握をおこなっている、ということができよう。

経済学批判要綱の草稿を執筆していた一八五八年二月、ラッサールにあてた手紙のなかでマルクスは、当時著述中の仕事は「私の十五年にわたる研究」の成果であると述べている。<sup>(2)</sup>したがってマルクス自身、かれの経済学批判の研究の起点を一八四三、四年ごろにしていることは注目してよい。そしておなじ手紙の中で経済学批判要綱について述べているつぎのことばは、マルクスの最初の経済学批判の試論的展開を示している。「ミル評注」にも、端緒的にあてはまることを認めることができるであろう。——「さしあたりここで問題になっている仕事は、経済学的諸範疇の批判である。あるいは、お好みならば、批判的に叙述されたブルジョア経済の体制だといってもよい。それは同時に体制の叙述であるとともに、叙述を通じてのその批判でもある」<sup>(3)</sup>。

「ミル評注」はほぼ右にのべたような内容と意義をもつ。

だがさらに、とりわけ私が注目する点は、「ミル評注」と『経哲手稿』との関連である。この二つの草稿は、相互補完的な意味をもつと考えることも、あるいは可能かもしれない。しかし、「私的所有」や「疎外された労働」（マルクスはミル評注で「営業労働」をこう呼びかえている）などの基本的範疇の概念内容が、両草稿でかなり相異していること、「ミル評注」での展開が『経哲手稿』で生かされず、両者の展開の間に論理的連続性が認められないことなどに着目すれば、この二つの草稿は同一の立場から視角と対象を変えて書かれたものとは、必ずしも言えないように思われる。両者の間には、国民経済学批判の基礎視角における一定の発展があるのではないか。この点を究明するとき、この段階におけるマルクスの経済学研究の成果と問題点が、とりわけ『経哲手稿』の経済学的意義が、いっそう明らかにされるのではなからうか。<sup>(4)</sup>

以下、各評注に直接関連するミルの所論とマルクスの抜萃とを紹介し、つづいてマルクスの評注をかかげる。

- (1) この二つの評注のほかにマルクスはもう一箇所、第四章第五節「地代にたいする租税」のところで、ミルおよび国民経済学一般の地代にたいする租税観を皮肉った、

一〇行ばかりの短評をくわえている。

(2) マルクス・エンゲルス『資本論に関する手紙』、岡崎次郎訳上巻、七七ページ。

(3) 同右書、七六ページ。

(4) ここに述べたような意味でも、「ミル評注」は、きわめて注目されてよい断片であるにもかかわらず、一九三二年 MEGA に発表されて以来、「経哲手稿」は多くの研究者によってとりあげられてきたのに反し、「ミル評注」に注目した研究者は長年のあいだほとんど皆無であった。はじめてこの評注を一般に紹介したのは、И・И・ローゼンベルク (Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в союзовое роля XIX века, 1954. 副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』)の功績といえよう。この評注を正面からとりあげた研究として、重田晃一氏の「初期マルクスの一考察——経済学批判への端緒としてのヘジュームズ・ミル評注」を中心として——「関西大学経済論集第八巻第六号」がある。なお、「ミル評注」と「経哲手稿」との関連については、近く別稿でたちいって論ずる予定である。

## I

第一評注は、ミルの貨幣論の批判として始まっている。

J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注(細見)

ミルの貨幣論は、第三章第六節以下数節にわたって論述されているが、そのうち貨幣論としての基軸をなすのは、第六節、第七節、および第八節である。

まず第六節でミルは、貨幣は直接的な貨物の交換、すなわち物々交換における諸困難を除去するために発見された交換の媒介者 a medium of exchange であると規定する。——これらの困難「物々交換にともなう困難」を除去するためには、処分すべき財貨をもっているすべての人が喜んで受けとり、かつかれが手に入れようと欲する物品の価値に適應するような量に分割することのできる貨物が発見されうれば、幸いであろう。このばあいには、羊を保有しながらパンあるいは上衣を欲している人は、それらを手に入れるためにかれの羊を提供するかわりに、まず羊をこの他の貨物の等価量と交換して、その後これでもって、かれの必要とするパンやその他の物を買うであろう。これがまさに、交換の媒介者の真の概念である。それは、二つの異なる貨物間の交換をなしとげるために、最初一方のものと交換に受けとられ、つぎに他方のものと交換に与えられるある一個の貨物である」(ミル九二—三、訳一一四)<sup>(1)</sup>。

そして、金や銀などの貴金属が交換の媒介者として貨幣として必要なあらゆる性質を高度にそなえていることが見いだされたと述べて、つぎに、貨幣の価値を規制するものについて論述する（第七節）。

ここでミルの問題とする貨幣の価値とは、「貨幣が他の貨物と交換される比率、あるいは他の物の一定量と交換される貨幣の量」のことである（ミル九五、訳一一六）。かかる貨幣の価値と交換比率は、ミルによれば、一国に存在する貨幣の総量によって規定される。「一国のすべての財貨が一方の側に、すべての貨幣が他方の側にあり、しかもそれらが同時に相互に交換されると仮定すれば、貨幣の価値はまったく貨幣の量に依存することは明らかである」（同上）。したがって、交換される財貨の総量と流通速度が一定であれば、「貨幣の価値が騰貴するか下落するときには、つねにこの変動は、これに比例した貨幣量の減少もしくは増加の原因とするものにならぬ、その他のいかなる原因によるものでもありえない」（ミル九七—八、訳一一八）。

貨幣の価値を規制するものが貨幣の量であるとすれば、後者はなにによって規制されるか。この問題を論じているのが、

第八節である。

ここでミルは、(1)貨幣の増減が自由に放任されているばあいと、(2)それが政府の統制のもとにおかれているばあいとを区別して、まず(1)のばあいから考察する。マルクスは、この部分（ミル九九—一〇一、訳二〇—二二）をほとんど省略せずに書き写し、つづいて第一評注を記している。かれの抜萃と評注は、つぎのとおり。

(1) 「ミルー」は『綱要』初版の、「訳一」は渡辺輝雄訳（春秋社）のページを表わす。

(2) ただし、マルクスは『綱要』の仏訳本をさらにドイツ語に訳してノートしているために、文章のニュアンスはミルの原文とはかなり異なったものになっている。以下ではマルクスの文章をそのまま邦訳し、とくに顕著な差異だけを注で指摘する。

「貨幣の製造は二種の事情のもとでおこなわれうる。すなわち、政府が貨幣の増減を自由に放任するか、それとも政府自身が貨幣量を規制して、それを思うままに増減させるか、のいずれかである。

第一のばあい、政府は造幣局を一般に公開して、希望する

すべての人々のために地金を貨幣に転形する<sup>(1)</sup>。地金をもって  
いる人々がこのような貨幣への転形をおこなうのは、それが  
かれらの利益であるときのみ、いいかえれば、かれらの地金  
が貨幣に転形されればもとの形におけるよりも多くの価値を  
もつばあいのみである。このことは、貨幣がとくに高価であ  
って、同一量の金属が鑄造された状態では地金の状態におけ  
るよりもいっそう多量の他の物品と交換されるばあいにのみ  
起こりうる。貨幣の価値はその量に依存しているから、貨幣  
は少量なるときにいっそう大きな価値をもつ。このときには  
地金の転形がおこなわれる。しかし、まさにこれによる増加  
の結果、以前の均衡が回復される。したがって貨幣が地金の  
価値より高くなれば、自由に放任されているときには、私人  
が干渉して貨幣量を増大させることにより、均衡が回復され  
るのである。「貨幣の量がひじょうに多くて、貨幣が地金の  
状態における価値以下に低下することもありうる。このとき  
にはただちに鑄造貨幣が地金に変形され、以前の均衡が同様  
の仕方で回復される。」

「したがって貨幣量の増減が自由におこなわれうるばあい  
にはいつでも、貨幣の量は金属の価値<sup>(2)</sup>によって規制される。

J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注(細見)

けだし、金属の価値が地金の状態におけるよりも貨幣形態の  
もとの方が大であるか小であるかに応じて、貨幣量を増加  
もしくは減少せしめることが私人の利益であるのだから。」  
「だが、貨幣<sup>(4)</sup>の価値が金属<sup>(4)</sup>の価値によって規定されるとすれば、  
この後者の価値はなにによって規制されるか? …金および  
銀は商品である。それらは労働と資本の使用を必要とする生  
産物である。それゆえ、すべての他の生産物と同様に、金お  
よび銀の価値を規制するものは、生産費である。」

- (1) ミルでは「鑄貨」。以下でも、「貨幣」とあるのの多  
くは、ミルでは「鑄貨」となっている。
- (2) 強調はマルクス。以下においても同様。
- (3) マルクスは、「貨幣形態のもとの方が小であるか大  
であるかに応じて」と書いているが、誤記である。
- (4) ミルでは、「貨幣量」。

(530) 右の<sup>(1)</sup>、貨幣と金属価値との補整関係を論じている

ところでも、生産費が価値決定における唯一の契機だ  
と述べたときと同様に、ミルはつぎのような——リカ  
ードウの学派に共通する——誤りをおかしている。す  
なわち、この学派は抽象的な法則を宣言して、この法



則の変化や不断の止揚——これなしには法則は生成しえない——には目をつぶるのである。もし、たとえば生産費が結局のところ——というよりもむしろ、需要と供給が周期的・偶然的に一致したばあい——価格（価値）を決定するというのが不断の法則であるとなれば、この関係が一致しないこと、したがって価値と生産費とはなんら必然的な関係をもたないということも、おなじく不断の法則である。事実、需要と供給が一致するのはいつでも一瞬のことにすぎない。この直前には需要と供給は動揺し、生産費と交換価値とのあいだに不釣り合いが生じている。そして需要と供給の瞬間的な一致ののちにはふたたび両者は動揺して、生産費と交換価値との不釣り合いが生ずるのである。これが現実の運動であって、リカードウの学派のいう法則は、この現実の運動の抽象的な、偶然的で一面的な一契機でしかない。しかるに最近の国民経済学者たちはこの現実の運動を、偶然事、非本質的なことにしてしまっている。なぜか？ そのわけはこうだ。かれら

は国民経済学を厳密精確な諸公式に還元する。だからかれらが右のような現実の運動を抽象的に表現しようとするとき、その根本公式はつぎのようになるほかないのである——国民経済学においては法則は、その反対物たる無法則性によって規定されている。国民経済学の真の法則は偶然である。この偶然的運動からわれわれ科学者は、いくつかの契機を好き勝手にとりだして、それを法則のかたちで固定するのだ、と。——

(1) マルクスの本文全体は、文章ごとあるいは段落ごとには、色鉛筆もしくは黒鉛筆で縦に消されている。〔MEGA 編集者の注。以下でも、とくにことわらないかぎり、注は編集者のものである。なお欄外の数字は、前掲 MEGA のページを示す。〕

(2) 〔訳者注〕「生産費が価値決定における唯一の契機だと述べたとき」とは、『綱要』第三章第二節「諸貨物が相互に交換される量を決定するもの」における論述をさしていると思われる。そこでミルはいつている、——「諸貨物の相対的価値、いいかえれば、一定量の他の貨物と交換される一貨物の量は、まず第一には需要と供給に、しかし究極的には生産費に、したがって、正確な言い方をすれば、それはまったく生産費に依存していると思わ

れる。需要あるいは供給の増減は、一定量の他の貨物と交換される一貨物の量を、一時的には生産費の点をこえて増減させることがあるかもしれない。しかし競争の法則は、それが妨害されないとどこでも、常にそれ〔一定量の他の貨物と交換される一貨物の量〕をこの点にもたらし、そしてこの点に維持する傾向をもつ」と（ミル六八―九、訳八一―二）。なお、ミルは、さらに「生産費そのものがいくぶんあいまいである」と指摘して、「生産において結合される二つの要具たる労働と資本」を分析する。そして、生産費は結局労働量に還元されるから、「諸貨物が相互に交換される比率を決定するものは、最終的には労働量である」（ミル七四、訳八七）と結んでいる。

(3) 「偶然的」は、あとから「周期的」のうえに書かれている。

ミルが貨幣を交換の媒介者と特徴づけているのは卓見で、事柄の本質を概念にもたらしめている。貨幣の本質は、さしあたり、そのうちに所有が外化されていることにあるのではなく、人間の生産物がそれをつうじて相互に補完しあうところの媒介活動ないしは運動が疎外され、人間的・社会的な行為が疎外されて、人間

エンストラレンデット

J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注（細見）

の外に存在する物質的な物たる貨幣の屬性になつてい  
ることにある。人間はこの媒介活動そのものを外化する  
ことによって、ここでは、自己を喪失した、非人間  
化された人間として活動しているにすぎない。事物の  
関係、そのもの、事物を操作する人間的作用が、人間の  
外に、しかも人間の上に存在する本質的作用になつて  
いる。この疎縁な仲介者——人間自身が人間の仲介者  
とはならないで——をつうじることによって人間は、  
自分の意志、自分の活動、他人にたいする自分の関係  
が、自分からも他人からも独立した力となつているの  
を直観する。こうして人間の奴隷状態は頂点にたつす  
る。この仲介者がいまや現実の神になることは明らか  
だ。なぜならこの仲介者は、それが私に媒介してくれ  
るものを左右する現実の力なのだから。これにたいす  
る礼拝が自己目的となる。この仲介者から切断された  
諸対象は、その価値を喪失した。だから、最初はこの  
仲介者が価値をもつのは、それが諸対象を代表するか  
ぎりでのことに見えたのに、いまや逆に、諸対象が価値

をもつのは、それらがこの仲介者を代表する、かぎりでのことにすぎない。最初の関係のこの逆転は、必然である。それゆえこの仲介者は、私的所有の本質が自己自身を喪失して疎外された実在であり、自己自身に外的となつた、外化された私的所有である。これはちょうど、私的所有が人間的生産と人間的生産との外化された媒介であり、人間の外化された類的活動であるのに対応している。だから、生産において人間の類的活動に帰属するすべての属性が、この仲介者に移譲される。こうして人間は、人間としては、つまりこの仲介者から切りはなされたものとしては、この仲介者が豊かに<sup>(1)</sup>なればなるほどますます貧しくなる。――

キリストはもともと、(1)神に<sup>(2)</sup>対する人間、(2)人間に<sup>(3)</sup>対する神、(3)人間に<sup>(3)</sup>対する人間、を表わしている。

(532) 同様に貨幣は、もともとその概念にしたがえば、(1)私的所有に<sup>(3)</sup>対する私的所有、(2)私的所有に<sup>(3)</sup>対する社会、(3)社会に<sup>(3)</sup>対する私的所有、を表わしている。

しかるにキリストは、外化された神であり、かつ外

化された人間である。したがって神は、もはやキリストの代りとしてしか価値をもたず、また人間も、キリストの代りとしてしか価値をもたない。貨幣についても、これと同様である。――

- (1) 「この仲介者が豊かに」のまえに、「かれがこの仲介者を豊かに」が消してある。  
 (2) (1)のあとに「Die Menschen Waren des einen」が消してある。

(3) (2)のあとに、「人間」が消してある。  
 なぜ私的所有は、貨幣制度に進まねばならないか？

それは、人間が社会的な動物として交換に、そして交換は――私的所有の前提のもとでは――価値にまで進まざるをえないからである。すなわち、交換をおこなう人間の媒介的な運動は、ならん社会的な運動でも人間的な運動でもなく、また人間的な関係でもない。それは、私的所有と私的所有との抽象的な関係である。この抽象的な関係が価値であり、そして価値の価値としての現実的な実存が、まさに貨幣にほかならない。交換をおこなう人間は、人間として相互に関係しあう

のではないのだから、事物は人間の所有、人格的所有の意味を失う。私的所有と私的所有との社会的な関係ということがすでに、そこにおいては私的所有が自己自身を疎外している関係である。この関係の向自有的実存である貨幣は、したがって、私的所有の外在化であり、私的所有の特有の、人格的本性を捨象された実在である。

したがって、近代の国民経済学がいかに知恵をしぼって貨幣体制、重金主義〔systeme monétaire〕に反対しようとも、決定的勝利をおさめることは不可能である。なぜなら、人民や政府が素朴な国民経済学的迷信にとりつかれて、感性的な、手にふれ目にみえるカネ袋に執着し、そして、絶対的な価値をもっているのは貴金屬だ、だから占有された貴金屬こそ唯一の実在する富だと信じこんでいるとき、——そこへ啓蒙され世事に通じた国民経済学者がやってきて、かれらにむかつて、貨幣といってもあらゆる他の商品とおなじく一個の商品なのだ、だからそれの価値は、あらゆる

他の商品とおなじく、需要（競争<sup>(1)</sup>）と供給にたいする生産費の関係、他の商品の量もしくは他の商品の競争にたいする生産費の関係によってきまるのだ、と証明してみたところで、——この国民経済学者には、つぎのような正当な反論が加えられるからである。そうはいっても、物の現実の価値はそれの交換価値であり、これは結局のところ貨幣のうちに、そして貨幣は貴金屬のうちに実存しているのではないか。だから貨幣こそ物の真の価値であり、それゆえもつとも望みがいのある物だ、と。実際、国民経済学者の教説にしても、結局落ちつくところはこれと同様な分別でしかない。ちがうところはただ、国民経済学者は抽象能力をそなえていて、このような貨幣の定有をあらゆる商品形態の背後に認識し、このために、貨幣の公定の金屬的定有のみに排他的な価値をみとめる迷信におちいつていないことだけである。——貨幣の金屬的定有は、市民社会の生産や運動のすべての肢節にこびりついている貨幣魂の、おおっぴらで感覺的な表現であるにす

ぎない。

(1) 「競争」は、あとから「需要」のうえに書かれている。

(2) 「そして貨幣は貴金属のうち」は、あとから書きこまれてゐる。

貨幣体制にたいする近代の国民経済学者たちの反対論は、かれらが貨幣本質を抽象性と普遍性においてとらえており、このために、貨幣本質はもっぱら貴金属のうちにのみ定有すると信じこむ感性的な迷信からぬけでゐることを意味するものにすぎない。この素朴な迷信を、かれらはお上品な迷信ととりかえる。だがいずれにしても本質的には根は一つなのだから、啓蒙された形をとつた迷信が、素朴で感性的な形の迷信を完全に駆逐しさせることは不可能である。けれど前者が攻撃するのはこの迷信の本質ではなく、この本質の特定の形態にすぎないのだから。——貨幣としての貨幣——したがって、たんに諸商品相互の内的、即自有的な、かくれた会話関係ないしは身分関係としての貨幣ではなく——の人格的な定有は、抽象的であればある

ほどいつそう貨幣の本質になつてゐる。つまりこの定有は、他の諸商品にたいして自然的な関係をあまりもたず、人間の生産物でありながらも他面では人間の非生産物として現象し、その定有要素が自然的な痕跡をとどめていなければいぬほど、つまり、この定有が人間によつて創り出されたものであればあるほど、貨幣の本質になつてゐる。これを国民経済学的に表現すれば、貨幣としての貨幣の人格的な定有は、その貨幣としての価値と、この定有が実存するところの素材の交換価値もしくは貨幣価値との反比例関係が顕著であればあるほど、それだけいつそう貨幣の本質になつてゐるのである。この意味で、紙幣および各種の紙製の貨幣代用物（たとえば、手形、為替、債券など）は、貨幣としての貨幣のいつそう完全な定有であり、貨幣制度の前進的発展における必然的な契機である。この貨幣制度は、信用制度——これの完全な表現が銀行制度である——においてひとつの仮象、すなわち、疎縁な物質的な力の支配が打倒され自己疎外の関

係が止揚されて、人間がふたたび人間にたいする人間的な關係にたちかえっているかの假象を呈する。サン・シモン主義者たちはこの假象にあざむかれて、貨幣から手形、紙幣、紙製の貨幣代用物、信用、銀行制度にいたる發展をば、人間と事物との、資本と労働との、私的所有と貨幣との、また、貨幣と人間との分裂、人間と人間との分裂が、一步一步止揚されてゆく過程だとかんがえている。だから、組織された銀行制度がこれらの理想なのだ。しかし、疎外がこのように止揚され、人間が自己自身へ、したがってまた他の人間へ還歸するかにみえても、それは假象にすぎない。むしろそれは、いつそういまわしい、そしていつそう極端な自己疎外、非人間化を意味している。なぜなら、ここでは商品や金屬、紙などちがって道徳的な定有、社会的な定有、人間の心情そのものという内的なもの、が疎外の地盤となり、したがってこの疎外は、人間にたいする人間の信賴という外見をとりながら、実は最高の不信と完全な疎外にはかならないからである。いった

J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注（細見）

い、信用の本質を構成するものはなにか？　ここではわれわれは、信用の内容——それはまたもや貨幣である——にはまったくふれないでおこう。すなわちわれわれは、信賴といわれているものの内容は度外視する。(534) 信賴とはもともと、人間が他の人間を承認することだ。ところが信用制度のもとではこの承認は、ある人間が他の人間に価値を前貸しして、——最善のばあいでは、すなわち前貸しする人間がこの信用にたいする支払いを要求しないばあい、つまりかれが高利貸しでないばあいでは——同胞たるこの人間に、こいつは悪者ではなくて「良い」人間だという信賴を与えるときに限られている。「良い」人間ということをおのづかしばあい、信用授与者はシャイロックと同様に、「支払い能力のある」人間の意味に解している。——信用は、二つの關係および二つの異なる条件のもとで考えうる。二つの關係というのは、こうである。第一に、金もちが、勤勉で義理がたいやつだときみこんだ貧乏人に信用を与えるばあい。この種の信用は、国民経済学のロマ

ンティックで感傷的な部分に属しており、国民経済学の脱線、ゆきすぎ、例外であつてその原則ではない。だが、このような例外を想定しこのようなロマンティックな可能性を認めるにしても、そのばあいでは、貧乏人の生命とその才能ならびに活動が、金もちにとつては貸した金が返却されるための保証になつてゐる。つまり言いかえれば、貧乏人のあらゆる社会的美徳、かれの生命活動の内容、かれの定有それ自体が、金もちには通常の利子をとまう資本の償還を意味してゐる。だから貧乏人の死は、信用授与者にとっては最悪の事態なのだ。それは、かれの資本プラス利子の死にひとしい。このように、信用関係のもとでは人間のねうちが貨幣で評価されているのだが、思えばこれはなんと破廉恥なことであるうか。自明のことだが信用授与者は、その相手にたいして種々の道德的な保証をもつばかりでなく、法律上の強制という保証や、その他なお多かれ少なかれ實際的な保証をもあわせそなへてゐるのである。つぎに、信用を与えられるひと自身が

裕福であるばあい。このときには信用は、もつばら交換を容易ならしめる媒介者となる。いかえればそれは、完全に観念的な形態に高められた貨幣そのものにほかならない。信用とは、人間の道德性にかんする国民経済学的判断である。信用においては金属や紙にかわつて人間そのものが、ただし人間としてではなく、資本およびその利子の定有として、交換の媒介者になつてゐる。したがつて、なるほど交換の媒介物が、物質的な姿態をとることをやめて人間へたちかえり、復帰してはいる。しかしこれは、人間それ自体が自己の外へひきずりだされ、みずから一個の物質的な姿態になりはてゐるからにはかならない。信用関係の内部では、貨幣が人間において止揚されるのではなく、人間それ自体が貨幣に転化してゐる、いかえれば貨幣が人間と合体してゐる。人間の個性、人間の道徳が、それ自体売買物品になるとともに、また貨幣を寄存せしめるところの素材となつてゐる。貨幣や紙にかわつて私自身の人格的な定有が、私の血と肉、私の社会的

美德と実力が、貨幣精神の質料、そのからだになつて  
いる。信用は、もはや貨幣をではなく、人間の肉と人  
間の心を貨幣価値の分身たらしめるのである。ごらん  
のように、まちがった体制の枠内では、すべての進歩  
が実は巨大な退歩なのであり、またすべての不徹底さ  
が実は徹底した破廉恥ぶりのこのうえない表現なので  
ある。<sup>(535)</sup>——信用体制の内部では、右にみた信用の本  
性、すなわち、人間にたいする最高度の国民経済学的  
承認をよそおいつつ人間を疎外する信用の本性は、二  
重の仕方で実証されている。(1)資本家と労働者との、  
大資本家と小資本家との対立が、つぎの諸事情によつ  
てますます大きくなる。すなわちまず、信用を与えら  
れるのはすでに持てるものであつて、金もちに蓄積の  
新たな機会を提供するものに限られていること。別言  
すれば貧乏人の生存は、生かすも殺すもまったくかれ  
にたいする金もちの偶然的な好みや判断にまかされて、  
完全にこの偶然に左右されていること。<sup>(2)</sup>たがいに嘘  
をつき、だましあい、偽善的にふるまうことがくまな

くゆきわたる結果、いまや信用を受けていないひとび  
とには、あいつは貧乏だという単純な判断にくわえて、  
あいつは信頼も承認も受けていないから社会のカスだ、  
下劣な人間なんだ、という道徳的判断がつけくわえら  
れる。こうして貧乏人は、窮乏のうえにこのような屈  
辱を加えられ、卑屈な態度で金もちに信用を懇請せざ  
るをえない破目に追いやられる。<sup>(3)</sup>貨幣がここではま  
ったく観念的な実存となるために、人間が他の素材で  
は、なくほかならぬ自分自身の人格を材料として、貨幣  
偽造を企てるのが可能になる。人間はみずから自己  
を偽造貨幣にしたてあげ、だましたり嘘をついたりし  
て信用を手に入れなければならない。こうしてこの信  
用関係は——信用授与者の側からも、信用を利用する  
ものの側からも——取引の対象、相互瞞着と悪用の対  
象となる。ここにいたつていまや、不信こそがこの国  
民経済学的信頼の土台であることは明々白々である。  
信用を与えるべきか否かにかんする不信にみちた考量  
信用を求めむひとの私生活その他の秘密を探ろうとす



るスパイ行為、競争相手の寸時の窮状でも密告して、かれの信用を突然揺るがせ破滅させてやろうとする企て、等々。破産の全体系、仮空事業、等々。……国家信用においては国家が、以上の叙述における人間とまったくおなじ立場に立つ。……国債のもてあそびをみれば、国家がまったく商人の遊び道具となつてゐることが明らかである、等々。

(4)信用体制は、最後に、銀行制度において完成される。銀行家の創出、銀行の国家支配、銀行の手中への資産の集積、国民のこの国民経済学的アレオバゴス法院は、貨幣制度のいかめしい完成態である。信用体制の中では、ある人間にたいする道徳的承認とか、国家にたいする信頼とかが、信用という形態をとつてゐるために、そこでは道徳的承認という虚構にひそむ秘密、すなわちこの道徳性なるものの非道徳的な破廉恥さや、かの国家にたいする信頼のうちにひそむ偽善とエゴイズムが、明らかに露呈され、現実にあるがままに示されている。

- (1) 「信用とは」のあとに、「道徳(的)」が消してある。  
 (2) 「国民経済学的」のあとに、「評価」が消してある。  
 (3) 「別言すれば：左右されていること」は、あとから書き加えられている。

(536) 生産そのものの内部における人間活動の、ならびに人間の生産物の相互的な交換は、類的活動と類的精神に等しい。そしてこれらの現実的で意識的な、真の定有が、社会的な活動と社会的な享受である。人間的な本質とは、人間が真に共同的存在であることにあるのだから、人間は、自己の本質の実証によつて人間的な共同体、つまり、個々の個人に対立する抽象的普遍的な力ではけつしてなく、それ自体個々人すべての本質であり、かれら自身の活動、かれら自身の生命、かれら自身の精神、かれら自身の富であるような、社会的な組織を創造し、産出する。したがつて、人間のこの真の共同存在は、反省によつて生じるものではない。それは、諸個人の必要とエゴイズムによつて、つまり、かれらの定有そのものの実証によつて

直接に産出されたものとして現われる。この共同存在が存在するか否かは、人間が左右しうることはない。とはいえ、人間が自己を人間として認識し、そこから世界を人間的に組織しおえていないうちは、この共同存在は疎外の形態で現象するのである。なぜならこの共同存在の主体たる人間が、自己自身を疎外された存在にとどまっているのだから。抽象における人間ではなく、現実の生きた特殊的個人としての人間は、この

ような「疎外された」存在である。だから、あるがままの人間は、疎外された存在そのものである。したがって、つぎのようにいうのはすべて同一の命題にすぎない。すなわち、人間が自己自身を疎外するということ、また、この疎外された人間の社会は、人間の現実的、共同存在の、すなわち人間の眞の類的生活の、カリカチュアであること、それゆえ疎外された人間の活動は苦悩として、かれ自身の創造物はかれには疎縁な力として、かれの富は貧困として、かれを他の人々と結びつける本質的なきずなは非本質的なきずなとして現

われ、むしろ他の人間からの分裂がかれの眞の定有として現われること、また、疎外された人間の生活は自己の生命を犠牲に供することとして、かれの本質の實現は自己の生命の非現実化として、かれの生産は自己の無の生産として、対象<sup>(2)</sup>にたいするかれの支配力はかれにたいする対象の支配力として現われ、自分の創造物の主人であるかれが、この創造物の奴隷として現われること、これらはいずれも、同一の命題である。

(1) 「と類的精神」は、あとから書きこまれている。

〔訳者注〕この「類的精神」Gattungsgesist は、ME-GA の編集者が「類的享受」Gattungsgenuß を誤訳したのではないかと思われる。おなじ MEGA に収録されている『経哲手稿』の第三手稿の一節「私的所有と共產主義」でマルクスは、MEGA によれば「活動と精神」「社会的活動と社会的精神」、「共同的活動と共同的精神」について論じている (S. 115f.)。しかしここに見られる「精神」はすべて「享受」の誤読であつたとみえて、K. Маркс и Ф. Энгельс, Из ранних произведений, 1956, p. 589-590) また、モスクワ版英訳本では consump-

- tion と訳されしる (p. 103-4)。ミル評注のこの箇所でも、「類的精神」が「類的活動」とならべられ、さらにこれにつづく文章で、「これらの現実的で意識的な、真の定有が、社会的な活動と社会的な享受である」と言われているのであるから、「類的精神」は「類的享受」の誤読であると断定しても、おそらく誤りではないであろう。
- (2) このまえに、「かれの消費は消費として現われ」が消費してある。

(3) 「自分の創造物の：奴隷として」は、「かれの創造物がかれの創造者として」から訂正されたもの。

ところで国民経済学は、人間の共同存在すなわち人間、本質の自己確証を、いいかえれば、人間が類的な生活、真に人間的な生活のために営む相互的補完行為をば、交換ならびに商業という形でとらえている。デステュット・ド・トラシはいう、社会とは相互的な交換の一系列である。それはまさに、こうして相互に融合しあう運動にほかならない、と。アダム・スミスによれば、社会とは商業社会である。その成員はすべて商人である。

ごらんのように国民経済学は、社会的交通の疎外さ

(537) れた形態をば、本質的で本源的な、したがって人間の本分にふさわしい形態として固定している。

(1) 「共同存在」は、「共同活動」から訂正されたもの。

国民経済学は——現実の運動とおなじく——、私的所有者、対私的所有者の關係としての人間、対人間の關係から出発する。人間が私的所有者として前提されれば、すなわち、人間が排他的な占有によって自己の人格性を確証し、またそれによって他の人間から自己を區別するとともに他の人間と關係する排他的な占有者として前提されれば、——このばあい、私的所有が人間の人格的な、かれを特徴づける定有であり、この意味で人間の本質的な定有となつてから——私的所有の喪失ないし放棄は、私的所有のもの外化であるばかりでなく、また人間の外化でもある。ここではわれわれは、前者（私的所有のもの外化）の規定だけをとりあげよう。私が自分の私的所有を他の人間に譲渡するとき、この私的所有は私のものであることをや

める。それは私から独立した、私の領分の外に横たわる事物、私には外的な事物となる。こうして私は、私の私的<sup>ザツク</sup>所有を外化している。だから、私にかなするかぎりでは、私はそれを外化された私的<sup>ザツク</sup>所有として定立しているのである。しかし、私がそれをただ私にかなするかぎりでのみ外化するときには、私はそれを単に外化された事物一般として定立しているにすぎず、私はただそれになりたいとする私の人格的な関係を止揚して、それを要素的な、自然諸力のもとに返還しているにすぎない。それが外化された私的<sup>エレメンタリーリッセン</sup>所有となるのは、ただ、それが私の私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有であることをやめながらも、なおかつ、そのために、そもそも私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有であることをやめなければい、つまり、それが以前に私自身にたいしてもついていたのと同じの関係を、私以外の他の人間ととり結ぶようになるばあい、一言でいえば、それが他の人間の私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有となるばあいに限られている。暴力によるばあいを除けば、——いったい私は、どのようにして私の私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有を他の人間に外化するように

なるであろうか？ 国民経済学はこの問いに正しく答えていつている、必要から、欲望からだ、と。この他の人間もまた私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有者である。だがかれは、他の事物、すなわち私には欠けていて、しかも私がそれなしで済ますことができないとかそれなしで済ますことを望まないもの、いいかえれば、私が自分の定有の完成と自分の本質の実現にとつてぜひとも必要だと思ふようなある他の事物の私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有者なのである。

(1) 「とともに他の人間と関係する」は、あとから書きこまれてゐる。

この二人の私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有者をたがいに関係づけるきずなは、両者の私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有の素材をなす対象の特有の性質である。これら双方の対象物にたいする憧憬、すなわちそれらにたいする欲望は、私的<sup>ナトウィルメヒテ</sup>所有者のおのおのにつきのことを示し、それをかれらに意識せしめる。すなわち、かれらは対象物にたいして、それを私的に所有すること以外になおもうひとつの本質的な関係をもっていること、かれらは自分でそうだと思つていよう

な特殊な存在ではなく全体的な存在であつて、その諸

欲望は他人の労働の生産物にたいしても内的所有の関

係にたつてゐること——なぜならある事物にたいする

欲望は、この事物が私の本質に属してゐること、い

かえれば、その存在は私に對してあり、それを所有

することは私の本質を所有すること、私の本質に固有

な屬性であること、まったく明白で反論の余地のな

い証明であるのだから——、このことを私的所有者の

おのおのに意識させる。こうしてこの二人の所有者の

(538) は、かれらの私的所有を放棄すべく駆りたてられる。

とはいつてもかれらは、同時に私的所有の実を示すよ

うなやり方でそれを放棄しなければならぬ。いいか

えれば、私的所有の關係の内部で私的所有を放棄しな

ければならない。したがつておのおのは、自分の私的

所有の一部分を他者に外化するのである。

だから、この二人の私的所有者の社会的、関連ないし

社会的、關係は、外化の相互關係であり、両側面で定立

された外化の關係、二人の所有者の關係としての外化

である。これにたいして單純な私的所有においては、  
外化はまだ自己にかんしてのみ一面的に生じるにすぎ  
ない。

(1) このまえに、「交換ないし交換取引はしたがつて」が  
消してある。

したがつて交換ないし交換取引は、私的所有の枠内

での人間の社会的行為、類的行為、共同存在、社会的

交通ならびに融合であり、したがつて外的な類的行為、

外化された類的行為である。まさにこのために、交換

が交換取引として現象するのである。だから交換も、

おなじく社会的な關係の反対物である。

私的所有の相互的な外化ないしは疎外によつて、私

的所有それ自体は、外化された私的所有という規定に

おちこんでゐる。というわけは、第一に、私的所有の

占有者が自分の私的所有を外化するときには、この私

的所有はもはや占有者の労働の生産物ではなくなり、

かれの排他的で特徴的な人格性ではなくなつてゐるか

らである。この私的所有は、それを生産した占有者の

手をはなれて、<sup>(1)</sup>それを生産したのではない、ひとにたいして一定の人格的な意味をもつにいたっている。<sup>(2)</sup>この私的所有は、その占有者にたいする人格的な意味を喪失している。第二に、この私的所有は他の私的所有と関係づけられ、これと等置されている。この私的所有は他の性質をもつ私的所有にとつて代わられ、逆にこの私的所有それ自身は他の性質をもつ私的所有の身代わりになっている。したがっていずれの側でも私的所有は、他の性質をもつ私的所有を代表するもの、他の自然生産物と等しいもの<sup>(3)</sup>として現象している。そしてこの二つの側面の相互関係はつぎのごとくである。すなわち、おのおのの側が自己の他者を代表し、そして両者はともども自己自身ならびに自己の他者の代理人として関係しあうのである。私的所有としての私的所有の定有は、それゆえ、代理物、等価物となっている。私的所有はもはや自己自身との直接的な統一においてではなく、他の私的所有にたいする関係として存在するにすぎない。等価物としての私的所有の定

有は、もはや私的所有に固有な定有ではない。こうして私的所有は価値に、直接には交換価値になっている。私的所有の価値としての定有は、私的所有の直接の定有とは異なった、私的所有の特有の本質に外的な、自己自身を外化された規定であり、私的所有のたんに相対的な定有である。

<sup>(539)</sup>ところで、この価値がさらにすすんでどのように自己を規定するかは、それがどのようにして価格となるかということとともに、他のところで展開されるはずである。

(1) 「それを…はなれて」は、「他の占有者の手中にはいつて」から訂正されたもの。

(2) 「それを…いたっている」は、あとからこのページの上の余白に書き加えられている。

(3) 「等しいもの」のまえに、「等価物」が消してある。

交換の関係が前提されれば、労働は直接的な営業労働となる。疎外された労働のこの関係は、つぎの事<sup>ニフツツ</sup>によつてはじめてその頂点にたつする。<sup>(1)</sup>すなわち、

(1) 一面で営業労働、労働者の生産物が、労働者の欲望

にたいしてもまたかれの労働規定にたいしてもなんら直接的な関係をもたなくなり、この両面から労働者にとって疎縁な社会的諸関連によって規定されること。

(2)生産物を買う、ひとが、自分では生産しないで他人によって生産されたものを取引すること。外化された私的所有すなわち交換取引のさきに見た未熟な状態では、二人の私的所有者のおおのは、直接自分の欲望に駆りたてられ、自分の素質と手もとの自然材料に応じたものを生産していた。だからおのおの私的所有者は、自分の生産の余剰分だけを他人と交換したのである。

労働はなるほどかれの直接の生計源泉<sup>ズピシタインツクツヴェ</sup>ではあつたけれども、同時にまた、かれの個人的実存の確証でもあつた。

ところが交換によって、かれの労働は部分的に営業源泉<sup>ニグヴェルンツクツヴェ</sup>となつた。労働の目的と定有とは、異なるものとなつたのである。生産物は価値として、交換価値として、等価物として生産されるのであって、もはや生産者にたいする直接的・人格的な関係のために生産されるのではない。生産がいつそう多面的になるに

つれて、したがって、一方では生産者の欲望がいつそう多面的に、他方ではかれの作業がいつそう一面的になるにつれて、かれの労働はますます営業労働の範疇に包括され、ついにはもはや営業労働の意味しかもたなくなる。こうして、生産者が自分の生産物にたいして直接的享受と人格的欲望の關係にたっているか否かということも、また、生産者にとって活動、労働行為それ自体が自分の人格性の自己享受、自分の天分ならびに精神的目的の実現であるか否かということも、まったく偶然的で非本質的なこととなる。

営業労働は、つぎの諸規定を含んでいる。(1)労働主体からの労働の疎外と偶然性。(2)労働対象からの労働の疎外と偶然性。(3)労働者が社会的諸欲望によって規定されること。しかもこの社会的諸欲望は、労働者にとっては疎縁なものであり、利己的欲望や必要のため甘受せざるをえない強制である。これは、労働者にとっては自分の必要をみたすための源泉という意味しかもたず、他面社会的諸欲望にとっては、労働者はた

だこれらの欲望につかえる奴隷として存在しているにすぎない。(4)労働者にとっては自分の個人的実存を維持することが活動の目的となり、現実の行為はかれにとっては手段の意味しかもたないこと。すなわち労働者がかれの生命を活動させるのは、生活手段を獲得するためでしかないということ。

(540) したがって私的所有関係の枠内では、社会的な力が大きく完全になればなるほど、人間はますます利己的で没社会的になり、人間固有の本質からますます疎外されるのである。

- (1) 「頂点」Höhe のまゝに、「絶頂」Spitze が消してある。
- (2) 「価値」のまゝに、「營業」が消してある。
- (3) 「と偶然性」は、あとから書きこまれている。
- (4) 「労働者が」のあとに、「労働する」が消してある。
- (5) 「力が」のあとに、「…としての必要」が消してある。

(1) 人間活動の生産物の相互的交換が交換取引、暴利商売として現象するのと同様に、活動それ自体の相互的補完と交換は、分業〔労働の分割〕として現象する。

J・ミル「政治経済学綱要」への批判的評注(細見)

分業は人間をとことんまで抽象的な存在に、旋盤などにしてしまい、そしてついには精神的ならびに肉体的な不具者にかえてしまう。

人間労働の統一性そのものが分割とみなされるのは、社会的本質がもっぱらその反対物として、すなわち疎外の形態で定有しているからにほかならない。文明の進歩とともに分業は高度化する。

(1) このまゝに、「相互的な活動、交〔換〕」が消してある。

分業を前提すればその内部では、生産物すなわち私的所有の材料は、個々人にとってますます等価物という意味をもつようになる。そして個々人がもはやかれの余剰分を交換するのではなくって、かれの生産の対象がかれにとってまったく無関心なものとなりうるのに対応して、個々人はもはやかれの生産物を自分が必要とするものと直接には交換しなくなる。等価物が、等価物としての実存を、貨幣において獲得する。こうなると貨幣は、いまや營業労働の直接の結果であり、そして交換の仲介者である。(先の叙述をみよ。)



貨幣において、すなわち、私的所有の材料の性質、私的所有の特有の性質にたいしても、また私的所有者の人格性にたいしても完全に無関心である貨幣において、疎外された事物の人間にたいする、完全な支配が現象するにいたっている。

人格にたいする人格の支配としてあつたことが、いまや人格にたいする事物の、生産者にたいする生産物の普遍的な支配となつている。私的所有の外化という規定はすでに等価物のうちに、価値のうちにひそんでいたが、貨幣はこの外化の感性的な、それ自体対象的な定有である。

国民経済学はこのような発展全体を、ただ一個の事実として、偶然的必要の所産としてしか把握しえていないことは、おのずから明らかである。

労働の自己自身からの分裂Ⅱ労働者の資本家からの分裂Ⅱ労働と資本の分裂。そして資本の本源の形態は土地所有と動産とに分かれる。……私的所有の本源のな規定は独占である。それゆゑ私的所有がわが身に政

治的憲法をあてがうや、それは独占の政治的憲法である。完成された独占が競争である。——国民経済学者にとつては、生産、消費、ならびに両者の媒介者としての交換ないし分配が、ばらばらになつている。別々の個人への、ならびに同一の個人における、生産と消費の分裂、活動と精神の分裂は、労働の対象ならびに<sup>(541)</sup>精神としての労働それ自体からの労働の分裂を意味している。分配は、私的所有の力の自己確証である。

——労働、資本、土地所有相互の分裂、ならびに労働と労働との、資本と資本との、土地所有と土地所有との分裂、そして最後に労働と労賃との、資本と利得および利得と利子との、最後に土地所有と地代との分裂、これらの分裂は、自己疎外を自己疎外の形でとともに、相互疎外の形ででも現象せしめる。

## II

第二評注が付されている第四章第三節におけるミルの主題は、総需要Ⅱ総供給の公式を「論証」し、これによって一般

的過剰生産を否定することにある。いうまでもなくマルクスは、この主題に大きな関心をよせ、綿密な抜き書きをおこなっているのであるが、しかし当面の第二評注にかんするかぎり、かれの主要な関心は、右の主題にかんするミルのいわば序論的論述（ミル一八六—一八九、訳二〇〇—二〇三）にある。すなわち、いかに他人の生産物を欲求しようとも、それにたいする等価物を保有していなければこの欲求を充足しえないという、「私的所有に基礎をおく交換」の特質をミルがここで描いているのに誘発されて、マルクスは、一面ではミルの論述をありのままの事実の描写として評価し、これをあとづけつつ、同時に、この事態が、人間関係の自己疎外的表現にほかならないことを明らかにしているのである。

この節からのマルクスの抜萃と、それにたいする批判的評注は、つぎのとおり。

第三節、「消費は、生産の程度に應じて拡大する。——人間が生産するのはただ、保有したいと望むからである。生産される客体が、かれが保有したく思っているものであるばあいは、かれは自分が使うだけのものを手に入れれば、働くこ

とをやめる。「だからかれの供給は、かれの需要と正確に一致する」<sup>(2)</sup>。：かれがそれ以上に生産するとすれば、それはかれがこの余分と交換に、なにか他の客体を保有したく思っているからである。：かれは、他の物を占取したいという欲求にかられて、一つの物を生産するのだ。この物の生産が、かれにとっては他の物を獲得するための唯一の手段であり、そしてかれは、これを自分で生産せざるをえないばあいよりもはるかに安く手に入れるのである。分業のもとではかれは、特定の物あるいはさらにその一部分だけを生産するにとどまって、かれ自身の生産の一小部分のみを自分で使う。そして残りをかれは、自分が必要とするあらゆる他の商品の購買にあてる。しかも、人間がただ一つの物を生産するにとどまって、かれの生産物をあらゆる他の生産物と交換するばあいには、各人はかれが欲するさまざまな物を、自分で生産しようとしたときに獲得しうる量よりも、いっそう多く獲得することになる。「人間が自分の生産したものを消費するかぎり、正確に言えば供給もなければ需要もない。需要と供給は、明白なことだが交換に、すなわち買手と売手に関連したことはである。しかし」人間が自分自身のために生産するときには、

交換は起こらない。かれはなにも買おうとしないし、またなにも売りにださない。かれは対象物を占有している。これを生産したのはかれであり、そしてこれを手離す意図をもたない。このばあいには比喩的に「需要と供給」ということばを適用すれば、ここでは需要と供給は完全に釣りあっている。販売される諸対象物の需要と供給にかんしていえば、われわれは、年々の生産物のうち、生産者の各々が生産もしくは受領したままの形で消費する部分を、まったく問題外におくことができる。」

「ここでわれわれが供給と需要というばあい、われわれは総体について言っているのである。われわれが一定の時代の一定の国民について、その供給がその需要に等しいというとき、われわれは一つや二つの商品についてそうだといっているのではない。われわれの言わんとするところは、すべての商品全体をひっくるめての需要が、その国民が提供しうるあらゆる種類の商品の総体と等しいということである。総体としてみれば、供給と需要はこのようにあい等しいにもかかわらず、一つあるはいくつかの特殊の商品が、これらの商品の需要に比べて過多にもしくは過少に生産されるということ

は、しばしば生じうることである。」「需要 (demand) を構成するためには、二つのものが必要である。すなわち、ある商品を手に入れようとする欲求と、交換において与えうる等価的客体の占有と<sup>③</sup>。需要とは、欲求と買うための手段とを意味する。もし一方あるいは他方が欠けておれば、購買は起こりえない。等価的対象物の占有は、あらゆる需要の欠くべからざる基礎である。ある人がなんらかの対象物を手に入れたら、それを得るために与えるべきものをなにも持っていないならば、かれの望みもむだである。ある人が提供する等価的客体が、需要の道具である。かれの需要の程度は、この対象物の価値で測られる。需要と等価的対象物とは、一方を他方で代用できることばである。すでにみたところであるが、生産するすべての人々は、自分で苦勞して生産したものと異なる種々の対象物の占有を熱望しており、この努力、この欲求の程度は、かれらの生産のうち、かれらが自身自身の消費のために留保する部分を除いた総体によって測られている。ある人が、自分が生産しながら自分で消費しようと欲しないものを、他の対象物と交換に与えることは、きわめて明白なことである。それゆえ、買おうとするかれの意

志と、それを実行するため、かれの手段とは、等しい。い  
かえれば、かれの需要は、かれの生産物のうちかれが自分で  
消費しようとする部分の総額に正確に等しい。」

(1) 強調はマルクス。以下においても同様。

(2) 「〔 〕」内は、マルクスでは省略されている。以下でも同  
様。

(3) 「すなわち…占有と」は、ミルでは、「それらは——一  
定貨物にたいする欲求と、それと交換に与えるべき等価  
物とである」(強調はミル)。

(4) 「等価的対象物」*äquivalentes Objekt* は、ミルでは  
「等価物」。以下でも同様。

(5) 「この対象物の価値」は、ミルでは「かれの等価物の程  
度」。

(6) 「それゆえ」以下の文章は、ミルでは、「それゆえ、購  
買しようとするかれの意志と、かれの購買手段とは、  
——いいかえれば、かれの需要は、かれが生産しながら  
も消費しようとするもの額に正確に等しい。」

(543) ミルはここで、もちまえの皮肉な調子で鋭くしかも  
明快に、私的所有に基礎をおく交換を分析している。

人間は——これが私的所有の根本前提であるが——

J・ミル「政治経済学綱要」への批判的評注(細見)

保有するのためにのみ生産する。生産の目的は、保有す  
ることである。しかも生産は、このような功利的な目  
的をもつだけではない。それは利己的な目的をもつ。  
人間は自分が保有するためにのみ生産する。かれが生  
産する対象は、かれの直接的な、利己的な欲望の対象  
化である。だから人間は、孤立しておれば——未開で  
野蛮な状態では——、自分が生産した対象そのものを  
直接に内容とするところの自分の直接的な欲望の大き  
さを、自分の生産の尺度としている。

したがって、この状態においては人間は、自分が直  
接必要とする以上には生産しない。かれの欲望の限界  
がかれの生産の限界である。だから需要と供給は正確  
に合致する。かれの生産はかれの欲望によって測られ  
ている。このばあいには交換はまったくおこらない。  
あるいはこのばあいの交換は、人間の労働とこの労働  
の生産物との交換に限られている。もっともこの交換  
が、現実の交換の潜在的な形態(萌芽)<sup>(1)</sup>ではあるのだ  
が。

(1) 「萌芽」は、あとから「形態」のうえに書かれている。

交換が生ずるやいなや、占有の直接的限界をこえる  
剰余生産が始まる。しかしこの剰余生産といえども、  
けつして利己的欲望を超越しているわけではない。む  
しろそれは、直接この生産のなかにはなく、他人の  
生産のなかに対象的な姿をみだしているある欲望を  
充足するための、媒介的、なやり方であるにすぎない。  
ここでは生産は、営業源泉、営業労働になっている。

したがって、最初の関係では欲望が生産の尺度である  
のにたいして、この第二の関係では生産が、というよ  
りもむしろどれだけ生産物を占有しているかが、どの  
程度諸欲望を充たしうるかの尺度である。

(544) ぼくは<sup>(1)</sup>ぼくのために生産したのであって、君のため  
ではない。同じく君は君のために生産したのであって  
ぼくのためではない。ぼくの生産の成果は君には絶対  
になんの関係ももっていない。これと同じく君の生産  
の成果は、ぼくには絶対になんの直接的な関係ももっ  
ていない。このことは、ぼくたちの生産が人間として

の人間のためにおこなう人間の生産ではないこと、す  
なわち社会的な生産ではないことを意味している。だ  
から人間としては、ぼくたちはいずれも相手の生産物  
にたいして享受の関係をもっていない。人間としての  
ぼくや君は、それぞれお互いの生産の眼中にはない。  
したがってぼくたちがおこなう交換にしても、ぼくの  
生産物が君自身の本質の、君の欲望の対象化であるの  
だから、ぼくの生産物は君にとってのものであるとい  
うことが、そこで確証されるような媒介運動<sup>(2)</sup>ではあり  
えない。なぜなら、ぼくと君との生産を相互に結びつ  
けるきずなは、人間的な本質ではないのだから。交換の  
なしうることはただ、ぼくたちがそれぞれ自分自身の  
生産物にたいしてもち、したがってまた相手の生産に  
たいしてもつている特質を、運動させ、実証すること  
だけである。ぼくたちはいずれも、自分の生産物のな  
かにはもつばら自分自身の対象化された利己心を見い  
だし、そして相手の生産物のなかには、自分には無関  
係で疎縁な、他人の対象的利己心を見いだすのである。

(1) 「ぼくは」のまえに、「交換において」が消してある。

(2) 「確認され」bestigtが草稿では「損傷され」beschädigtとなっていた。

なるほど君は、人間としてはぼくの生産物にたいして人間的な関係をもっている。なぜなら君は、ぼくのプロダクトにたいする欲望をもっているから。この意味ではぼくのプロダクトは、君にとって君の欲求と君の意志の对象として現存している。しかし君の欲望も、君の欲求も、君の意志も、ぼくのプロダクトにとっては無力な欲求、無力な欲求、無力な意志である。つまりいいかえれば、君の人的な本質、したがってぼくの人的な生産にたいして必然的に内的な関係にたっている君の本質といえども、ぼくのプロダクトを支配する力、ぼくのプロダクトにたいする所有を君に与えるものではない。なぜなら、人的本質の固有性、人的本質の力が、ぼくのプロダクトのなかで承認されていないからである。むしろ、ぼくのプロダクトにたいする君の欲求や欲求、意志などは、君をぼくのプロダクトにたいする従属へと追いこむもので

あるから、君をぼくに従属させるべきなのである。それらは、ぼくのプロダクトを支配する力を君に与える手段であるところか、逆に君にたいする支配力をぼくに与える手段である。

ぼくが、生産された対象物を直接自分で使いこなさう以上、生産するばあいには、ぼくの剰余生産は君の欲望をあてこんでおり、勘定にいれている。ぼくがこの対象物を余分に生産しているかにも見えても、それは、対象にすぎない。実際にはぼくは、他の対象物を、すなわちこの剰余分と交換しようと思つているところ——この交換をぼくは、頭のなかではすでにやりと<sup>(1)</sup>げている——君の生産の対象物を生産しているのだ。したがって、ぼくが君ととり結んでいる社会的な関係とか、君の欲望を充たすためのぼくの労働とかは、まるまるの仮象である。また、ぼくと君との相互の補完関係というのも、同様にまるまるの仮象であつて、その底には相互的奪取の関係が隠れている。奪取、瞞着の意図が背後にひそんでいるのは必然だ。なぜなら、

(545) ぼくたちの交換は、君の側からもぼくの側からも利己的な交換であつて、それぞれの利己心が相手の利己心にうち勝とうとするのだから、ぼくたちは必然的にだましあいを演ずることになるわけである。ぼくはぼくの対象物に、君の対象物を支配する力を認める。けれどもこの力の程度は、現実的な力となるためにはもちろん君の承認を必要とする。しかし、ぼくと君とがそれぞれの対象物相互の力をたがいに承認しあうことは、ひとつの戦いであつて、戦いにおいてはヨリ多くの氣力、体力、分別あるいは老練さをそなえているものが勝つ。腕力が十分なら、ぼくはじかに君から奪取する。腕力の世界が打破されておれば、ぼくたちはたがいにだましあいを演じて、もつとも老練な方が相手から詐取する。どちらが相手から詐取するかは、この関係全体にとっては偶然のことにすぎない。私念のうえでの、観念的な詐取は、どちらの側でもおこなわれているのだ。いいかえれば、両者はいずれも自分自身の判断では、相手から詐取したのである。

(1) 「この交換を……やりとげている」は、あとから書き加えられている。

したがつて交換は、どちらの側からみても、それぞれ相手が生産し相手が占有している対象物によって、必然的に媒介されている。ぼくと君とのあいだでの、相互の生産の対象物にたいする観念的な関係は、いうまでもなくぼくたち相互間の欲望である。けれどもこの関係が、自己を現実<sup>1)</sup>に定立する実在的な関係、自己貫徹的な真の<sup>1)</sup>関係となるためには、ぼくたちはたがいに相手の生産を排他的に占有しなければならぬ。ぼくの物にたいする君の欲望に、ぼくにとつての価値、<sup>1)</sup>ねうち、効力を与えるものは、ぼくの対象物の等価物としての君の対象物だけである。だからぼくたち相互の生産物は、ぼくたち相互間の欲望の手段であり、媒介、道具、承認された力である。したがつて、君の需要と君が占有している等価物とは、ぼくにとつては同義的な、おなじ意味のことばであつて、君の需要はぼくにとつての意味と効力をもつときにはじめて、効

力をもち、それゆえまた意味をもつ。君がこの道具をもたない素手の人間であるときには、君の需要といつても君の側では充たされぬ望みであり、ぼくにとつては現存しない気まぐれでしかない。だから人間としての君は、ぼくの対象物にたいしてなんの關係もっていない。これは、ぼく自身がぼくの対象物にたいして人間的な關係をもっていないためである。人間ではなくて手段が、対象物を支配する真の力なのだ。したがってぼくたちは、たがいに自分の生産物こそが、相手を支配しまた自分自身をも支配する自分の力であることを直観する。いいかえれば、ぼくたち自身の生産物が後足で立つてぼくたちにたちむかっているのだ。それはぼくたちの所有物のようにみえたのに、実は逆にぼくたちがそれに所有されているのである。ぼくたち自身は、ぼくたちの所有が他の人間を排除しているために、真の所有からしめだされている。

(1) 「欲望」はこのばあい三格なのに、草稿では二格の形 *Bedürfnisses* になっている。

J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注(細見)

ぼくたちがたがいに語りあつて通じる唯一のことは、相互關係におかれたぼくたちの対象物である。人間のことは、ぼくたちのあいだでは通用せず、たとえ語られてもむだであろう。それは、一方からは、嘆願だ、哀願だ、だから面目まるつぶれだと考えられ感ぜられ、したがって卑屈な気分で恥ずかしげに発せられる。そして他方からはそれは、恥知らず、狂気のさたとうけとられ、はねつけられるであろう。ぼくたちは、たがいにすっかり人間の本質から疎外されているために、人間の本質の直接のことばはぼくたちには、人間の尊厳を傷つけるものとおもわれ、反対に事物の価値という疎外されたことばが、公認された、しかも自信にみちて自己自身を承認しつつある人間的尊厳にみえるのである。

なるほど君の目から見れば、君の生産物はぼくらの生産物を手に入れて、さらには君の欲望を満足させるための道具であり手段である。だがぼくの目から見れば、それは君との交換の目的である。ぼくにとつてはむしろ



ろ君自身が、この対象物——これは、この関係において多くの生産物が君の目的であるのと同様に、ぼくにとっての目的である——を生産するための手段ならびに道具としての意味をもつ。しかしながら、(1)ぼくたちはどちらも現実には、自分にたいして相手が直観しているとおりのことをおこなっているのだ。君は現実

には、ぼくの対象物を手に入れるために、君を君自身の対象物の手段、道具、生産者にしてしまっている。(2)君自身の対象物は、君にとってはぼくの対象物の感性的な、外被、隠れた姿であるにすぎない。(1)なぜなら君の対象物の生産が意味し、表現しようとしていることは、ぼくの対象物の獲得にあるのだから。したがって君は、実際は君自身にとっても、君の対象物の手段、道具になっっている。君の欲求は君の対象物の奴隷であり、そして君は奴隷の労役を果したのであるが、しかし君の欲求の対象物はけっしてお返しに恩恵を施してはくれない。ところで、このようにわれわれがたいに対象物の奴隷となる関係が、発展のはじめには主人と奴隷

の関係として現実に現象するとしても、それはわれわれの本質的な関係の赤裸々で公然たる表現であるにすぎない。

(1) 「隠れた姿」は、あとから書きこまれている。

(2) 「それは」のあとに、「相〔互〕の」が消してある。

ぼくたちの相互的な価値は、ぼくたちにとっては、ぼくたち相互の対象物の価値である。したがって人間そのものは、ぼくたちのあいだでは無価値である。

ぼくたちが人間として生産したと仮定しよう。このときにはぼくたちは二人とも、自分の生産のなかで自分自身と相手とを、二重に肯定したことであろう。ぼくは、(1)ぼくの生産においてぼくの個性を、ぼくの個性の固有性を、対象化したことであろう。それゆえには、活動の最中には個人的な生命発現の喜びを感じ、また対象物を眺めては、自分の人格性を対象的な、感性的に直観できる、それゆえまったく疑問の余地のない力として知るといふ個人的な喜びを感じたことであらう。(2)ぼくは多くの生産物を君が享受したり使ったりす

るのをみて、ぼくは直接つぎのような喜びを感じる  
ことであろう。すなわち、ぼくは労働することによって  
人間的な欲望を充たすとともに人間的な本質を対象化  
し、したがってある他の人間的な本質の欲望に、それ  
に適合した対象物を供給したことを意識する喜び、(3)<sup>(2)</sup>  
(547) ぼくは君にとって君と類とを仲だちする仲介者とな  
り、したがってぼくが君自身の本質の補完物であり君  
自身の不可欠の一部分であることが、君自身によって  
知られ感じられており、したがって君の思惟のなかで  
も君の愛のなかでもぼく自身を確証しているのを知る  
という喜び、(4)<sup>(2)</sup> ぼくの個人的な生命発現のなかで直接  
に君の生命発現をつくりだし、したがって、ぼくの個  
人的な活動のなかで直接ぼくの真の本質を、ぼくの人  
間的な本質を、ぼくの共同本質を確証し実現したとい  
う喜び、こういう喜びをぼくは直接味うことであ  
らう。

ぼくたちの生産行為はそのひとつひとつが、ぼくた  
ちの本質を映しだす鏡となるであろう。

J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評注(細見)

ぼくたちが人間的に生産するばあいにはぼくの側で生  
じる以上のような関係は、同時にまた君の側でも生じ  
るだろう。

(1) 「知る」のまえに、「享受する」が消してある。

(2) マルクスはまちがって、それぞれ(2)、(3)と書いている。

(3) 「本質」のまえに、「生命」が消してある。

つぎにわれわれは、右のように想定したばあいに現  
われる種々の契機を考察しよう。

そのときにはぼくの労働は、自由な生命の発現とな  
り、それゆえ生命の享受となるだろう。私的所有の前  
提のもとでは、ぼくの労働は生命の外化である。なぜ  
ならぼくが労働するのは生きるためであり、生活の手  
段を手に入れるためなのだから。ここではぼくの労働  
は、生活ではない。

第二に、われわれが想定するばあいには、したがっ  
て、労働のなかでぼくの個人的な生命が肯定されるの  
だから、ぼくの個性の固有性が肯定されることになる  
だろう。だから労働は、真の活動的な所有となるだろ

う。私的所有の前提のもとでは、ぼくの個性はとことんまで外化されているために、この活動はぼくにとつては憎らしいもの、苦悩である。それは、活動というよりもむしろ活動の仮象にすぎず、したがってまた、強制された活動にすぎない。それは内的・必然的な必要によってではなく、もっぱら外的・偶然的な必要によって、ぼくに課せられるのである。

ぼくの労働は、現にそれがあるがままの姿でしかぼくの対象物のなかに現われえない。それは、その本質に逆らうような姿で現象することはできない。だから、ぼくの労働は、ぼくの自己喪失とぼくの無力さとの、対象的で感性的な、直観されたままの、それゆえまったく疑問の余地のない表現として現われるほかないのである。